

絵図が語る みなと新潟

長谷川 伸

今年度は新潟が開港して一四〇周年にあたります。新潟にとって「みなと」は、どの時代においても人々のくらしとは切っても切れない関係にあります。それでは新潟の「みなと」とはどのようなところだったのでしょうか。

江戸時代以前、船は棧橋や岸壁などの施設だけでなく、入江や海岸、河口・川岸などの、自然の地形を利用して碇泊しました。なかでも、大河川の河口は重要な「みなと」でした。新潟の「みなと」は信濃川・阿賀野川と日本海が出会う河口にあったことが特徴です。

江戸時代、新潟の「みなと」は日本有数の湊として栄えました。しかし、開港後は近代的な港湾施設が整備されるまで、全く貿易等が振るわれない冬の時代もありました。実はこの背景には、江戸時代に信濃川と阿賀野川の流路や流量が大きく変化し、それに伴って、新潟の「みなと」とその周辺部の地形や環境もまた、大きく変わったことも要因のひとつであったと考えられます。

今回の展覧会では、こうした新潟の「みなと」の変遷を紹介します。まず、信濃川と阿賀野川の河口に蒲原・沼垂・新潟の三つの「みなと」が存在した戦国時代を考えます。新発田重家の乱

などを経て、新潟・沼垂は上杉景勝・直江兼統の手によって、上杉氏の湊として整備されました。なお直江兼統が支配した戦国時代末期の西蒲原地域内に、「角海浦」という「みなと」がありました。

17世紀になると、沼垂町は約五〇年間に四回移転しました。阿賀野川の洪水によって、信濃川と阿賀野川は河口で合流し、沼垂は浸食されたため、町は度々移転しなければならなくなりました。沼垂町の移転は、信濃川を挟んで対峙する新潟と、「みなと」の権利を巡る争いに発展します。

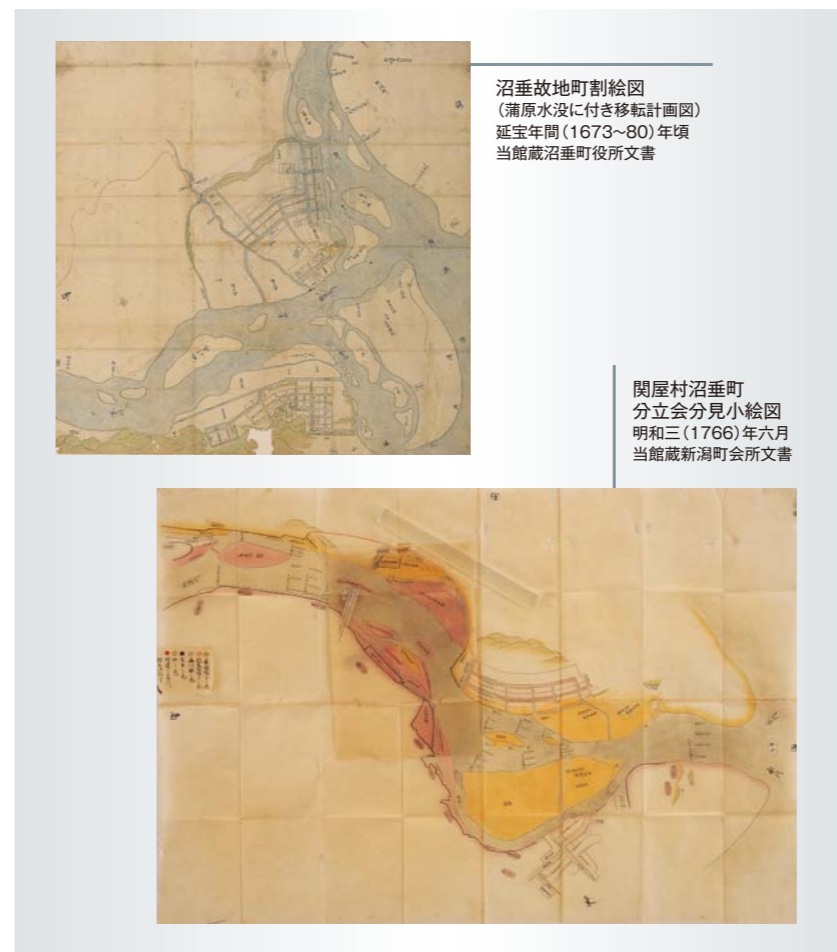
そして両者は、川が運んできた土砂が作り上げた「砂州」をめぐる争論を展開していきます。

一七二〇年代、紫雲寺湯干拓の過程で作られた松ヶ崎堀割は雪解け水の洪水で破壊され、現在の阿賀野川の河口が生まれました。これは土木工事技術の未熟さと自然の力がもたらした地形の変化ですが、このことは、新潟の「みなと」に大きな影響を与えました。このことによって、阿賀野川の水量が減り、新潟の「みなと」が浅くなってしまいました。この問題を抱えながら、新潟「みなと」は「開港」を迎えることになったのです。

今回の企画展では、当館所蔵の新潟

町会所文書・沼垂町役所文書という史料群の中の大型絵図を中心にして、地形の変化が新潟の「みなと」の形成・発達にどのような影響を与えていたのかを、紹介していきます。

これらの絵図は、新潟町・沼垂町の人々が「みなと」に関わる重要な資料として、町会所文書・沼垂町役所文書という史料群の中の大型絵図を中心にして、地形の変化が新潟の「みなと」の形成・発達にどのような影響を与えていたのかを、紹介していきます。



て大切に保存し、伝えてきたものです。また、近年発掘された近世新潟町遺跡の出土品も展示します。こうした人々の思いに心を寄せながら、湊町新潟の歴史を再発見していただきたいと思えます。

(はせがわ しん 学芸員)

常設展示室から — 川村資料展示替え —

8月5日から新潟奉行川村修就の治績を紹介するコーナーの展示が替わりました。今回は展示を新潟奉行所の建築に絞りました。

天保14(1844)年に新潟上知が実施され、新潟町は長岡藩領から幕府領となり、江戸から川村修就が新潟奉行として新潟町に赴任します。これにともなって奉行が暮らし、執務を行う新潟奉行所が、旧長岡藩領時代の町奉行所の一部を利用しながら建設されます。川村は配下の者を連れ10月に新潟町に到着しますが、その翌月には奉行所の設計が始まりました。新たに奉行所の役人の中から御普請目論見御用掛(工事が開始されると御普請御用掛と名称変更)が任命され、奉行所の図面を引いたり、費用の積算をしたりして仕事を進めました。翌年2月に建築の仕様がほぼできあがり、4月には入札が行われました。この工事を落札したのは新発田町の市島次郎八で、回船業や酒造業などをなりわいとしていました。なお、当時、次郎八は親戚の市島次郎吉(白山神社に大船絵馬を奉納)と組んで、越後幕領の御城米の江戸・大坂への輸送を請け負ってました。落札金額は、地盤工事と建物工事の2つの費目を合わせた8,200両余でした。

実際の工事は弘化2(1845)年1月に始まり、同年中に終了しました。建設の労をねぎらうため將軍から川村へ時服が下賜され、配下の者にも幕府から褒美が与えられました。

奉行所には長岡藩時代の町奉行所にはなかった

建物や施設がいくつか設けられました。その1つが白州で、幕府から行政だけでなく司法の権限を委任された新潟奉行にとって、職務上必要不可欠な施設でした。また、火薬製造所も建てられました。ここでは、幕府より異国船防備の命を受けた川村が、海岸に設置した砲台や海岸での砲術訓練が必要だった火薬が製造されました。その他にも、江戸から連れて来た配下の者が暮らすために役宅や足軽長屋も造られ、新潟町支配にふさわしい新潟奉行所ができました。

展示室では建て替え前・建て替え後の奉行所の絵図面、建築の仕様書、幕府への工事の伺い書、工事請負者への月ごとの支払い額やその日付が記された史料を展示しています。これを機に、8,200両余にも及ぶ大プロジェクトであった新潟奉行所の建設の概要を知っていただければと思います。

(若崎敦朗 学芸員)



おすすめの1冊

『イザベラ・バードの日本紀行 上・下』

イザベラ・バード著 時岡敬子訳 講談社学術文庫 二〇〇八年四月・六月

明治初年の新潟は堀を舟が行き交う清潔できれいな街並みだったと、新潟の歴史を記す本には記述されてきました。その根拠は「一八七八(明治十二年七月)に新潟を訪れたイギリス人女性イザベラ・バードの『日本奥地紀行』」です。この本は二八八〇年に二巻本として刊行され、二八八五年に普及版が出ました。この普及版が一九七三(昭和四十八年)に平凡社東洋文庫から高梨健吉訳で刊行されました。バードの具体的な記述は、新潟の姿を漢詩文や新聞から推測してきた人々に衝撃を与え、以後、新潟のイメージとなってきました。

しかし、この普及版は二巻本の抄出で省略部分の多い本でした。今回、二巻本全訳が講談社学術文庫から刊行されました。普及版にはなかった、新潟におけるキリスト教伝道についての覚書、寺院や商店での見聞などが含まれ、新潟の町や人々の姿がより具体的に興味深く述べられています。明治の新潟の姿をより詳しくイメージできると思いますので、ぜひ一読をお勧めします。

(伊東祐之 学芸課長)

